

信仰の恵み

【聖書】 ヨブ記1章18～21節

彼が話し終らないうちに、更にもう一人来て言った。「御報告いたします。御長男のお宅で、御子息、御息女の皆様が宴会を開いておられました。すると、荒れ野の方から大風が来て四方から吹きつけ、家は倒れ、若い方々は死んでしまわれました。わたしひとりだけ逃げのびて参りました。」ヨブは立ち上がり、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏して言った。「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」

2章7～10節

サタンは主の前から出て行った。サタンはヨブに手を下し、頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった。彼の妻は「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」と言ったが、ヨブは答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。」このようになって、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。

[序] 心からの感謝

去る10月22日から夫婦で札幌を訪れ、28日夜無事に帰って参りました。お祈りを感謝いたします。今回の札幌訪問の第一の目的は、25日夜札幌コンサートホールで開かれた「**真部武弘 讚美歌の世界**」に出席するためでした。真部兄は福島から上京して、西川口教会でバプテスマを受け、音楽学校を卒業するとロマンを求めて、札幌の中学校音楽教師として赴任して来ました。

彼は平岸教会に出席する積りだったそうですが、宣教師のフーバー先生との出会いから札幌教会に籍を移し、聖歌隊の一員となり、やがて教育大音楽科を卒業した恵子さんと結婚し、指揮者、讚美歌作曲家として**札幌教会一筋に45年間**奉仕を続けて来られました。喜美子の作詞した歌も沢山作曲して、教会で歌われるようにして下さいました。

早いもので彼も70才。そこで**古希**を記念するコンサートを聖歌隊あげて開催したのです。札幌教会内の3つのグループと市内の讚美歌グループがそれぞれ真部作曲の讚美歌を歌い、最後のステージは総勢75人が真部兄の指揮で詩編96編と100編を大合唱し、500人の会衆を感動させました。このような素晴らしい**讚美歌作曲家**を生み育てた教会の恵みをしみじみと味わい、心から神さまに感謝しました。

27日の日曜は札幌教会の伝道所だった**リビングホープ教会**の礼拝で説教奉仕をさせていただきました。三宅牧師夫妻は、シンガポールの神学校に留学中の1年半余を、私たちの日本語教会で過ごしました。帰国後の奉仕教会が、所属していたアッセンブリー教団内に見つからなかったの、無牧師で困っていたリビングホープ教会にお世話しました。教派が違う教会での働きに馴染んでくださっているだろうかと案じておりました。

川越と同じ位の小さな群れですが、若い牧師のギターで精一杯に三曲歌う讚美歌で始まる礼拝は、とても雰囲気の良いものでした。昼食後にヴィジョンを語る会があり、皆が活発に発言していました。帰り際に奥さんが、「今回は説教準備がなかったので、一日教会を離れて祈りに行ってもらいましたら、この教会に**長く仕える決心**が与えられたようです」と嬉しそうに教えてくれました。感謝でした。

23日の水曜は朝晩、札幌教会の祈祷会で奨励をし、大勢の方たちと旧交を暖めました。また時間の許す限り、いろいろな方を訪ねしてお祈りしたり、相談にのることが出来ました。その嬉しいことの一つ。昨日一箱の荷物が届きました。おそばがびっしりつまっています。手紙が添えられていました。「お忙しい中、色々とお話申し上げました。いつも頼りにいたし、申し訳なく、感謝しております。お顔を見てお話いただけましたので、心の中にしみわたり、強められました。**正彦の心も安らぎ**、立ち上がって進んでくれると思います。近ければいつでもお目にかかれるのと思う毎日です。9月末に刈り取りました**新蕎麦**は例年になく色がよく出来ましたが、香りが薄いようです。ご賞味下さい」。

正彦君は私が札幌教会で開設した不登校の中学生たちの居場所**コイノニア学園**の生徒の一人です。シンガポールに赴任してからもしばらく預かりました。どうやらお父さんの会社で働けるようになりましたが、時々落ち込みます。札幌教会は人数が多いので気おくれして入り込めないのです。リビングホープ教会の礼拝に誘いましたらお母さんと一緒に出席してくれました。そして、夕方ホテルに訪ねて来て、開口一番「先生、今日の教会だと続けて出席出来そうです」と言うのです。「それはよかった。小さな教会の方が安心して溶け込めるね。両方の教会の牧師に伝えておくから、とにかく礼拝を続けようね」。もう **35 才**ですが、いつも**お母さんと一緒**です。でも元気を出してくれるお役に少しなったようです。

また今日は **83 才の兄**が皆さんの前で信仰告白をして、バプテスマを受けてくれました。思えば2年前に突然電話がかかってきました。「享のそばで晩年を過ごしたいから、川越に住む所をさがして欲しい」。びっくりしました。早速気に入った所に引越して来て、それから夫婦で礼拝を守るようになり、今日を迎えたのです。**人生の最晩年**を兄弟が夫婦一緒に礼拝を守りながら過ごせるとは、これほど嬉しいことはありません。

兄の信仰告白を聞いておりますと、**父とそっくり**の人生に驚きます。父も浮き沈みを繰り返す生涯でした。「ママのおかげで、ママのおかげで」と言いつつ、母に苦勞を掛け続けました。しかし最晩年を札幌の牧師館で平安に過ごし、感謝し満足して死んでくれました。

義姉さんも母同様にさぞ苦勞をして来られたことでしょう。よくぞ耐えて下さいました。これからは母同様に、礼拝を守りながら平安な晩年を共に過ごして頂けたらと願います。札幌での日々といい、今日のこの礼拝といい、**牧師をさせて頂いている幸せ**をしみじみ思います。このような日々を過ごせて私は、本当に幸せ者です。

[1] ヨブの悲劇

さて前置きが長くなってしまいましたが、今日与えられている聖書は**ヨブ記**です。ヨブは東の国一番の**大金持ち**でした。彼は**全く潔白で正しい人**で、神を畏れ、悪を避けて生きていました。ところが人生の半ばに、次々と災難が降りかかってきたのです。畑も羊やらくだも略奪されて、**全財産**を失ってしまいました。そして最後には、長男の家に集まって宴会をしていた**10人の子どもたちが**、突然の大風で潰された家の下敷きになって、死んでしまったのです。何という悲劇でしょうか。

ヨブは、衣を裂き、髪をそり落とし、地にひれ伏しました。しかし彼の口から出てきた言葉は、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。**主は与え、主は奪う**。主の御名はほめたたえられよ」だったのです。驚くべき言葉ですね。私たちだったら、「何たることだ。神も仏もあるものか」と叫び狂うところではないでしょうか。

2章に進みますと、今度はヨブ自身が頭のとっぺんから足の裏まで**ひどい皮膚病**にかかってしまいました。ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしりました。二目と見られない惨めな姿です。とうとう彼の奥さんも耐えられなくなって、叫びました。「どこまでも無垢でいるのですか。**神を呪って、死ぬ方がましでしょう**」。しかしヨブは答えました。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、**不幸もいただくのではないか**。」

ヨブの親友3人が、彼にふりかかった災難の一部始終を聞くと、彼を見舞い慰めようとやってきましたが、見分けられないほどの姿を見て、歎きの声をあげ、衣を裂き、塵を頭にふりかけて、**七日七晩**、ヨブのそばの地面に座り、彼の激しい苦痛に、話しかけることもできなかつたと記されています。**ヨブの悲惨さ**はそれ程のものだったのです。

やがてヨブの訴えをきっかけに、友人たちとの問答が3章から37章にかけて繰り広げられます。そして最後に、神さまご自身が、ヨブに語って下さることによって、ヨブに**最終的な平安**がもたらされます。

[2] 宗教の役割

宗教の役割とは？「病気の癒しと金儲けを保障すれば、その宗教は繁盛する」と言われています。無病息災、商売繁盛、家内安全——多くの人は、このために手を合わせて祈願をし、信心をいたします。かなえられなければ、神社やお寺を変えて、お参りします。いろいろな神社やお寺のお札を部屋に飾っている家をよく見かけます。

ところがヨブは、全財産を失っても、子どもたちを失っても、また自分の健康を失い惨めな体になっても、自分が信じて生きてきた**神さまを呪いませんでした**。「裸でこの世に生れて来たのだから、裸で帰っていくのだ」、「幸福をいただいたのだから、不幸もいただくのではないか」。自分の人生はすべて、神さまの御心によって導かれているのだから、良いことも悪いことも全てを、そのまま受けとめて、**神さまを信じ続けて**生きていこうという信仰ですね。

この世では、「金の切れ目が縁の切れ目」で、人が離合集散を繰り返します。夫婦にしても、友達にしても、良い時ばかりではありません。相手から迷惑ばかりこうむるようになると、腹が立ち、嫌気がさしてきて、**離れようとする心**を、私たちは皆もっています。だから自分が相手に迷惑ばかりかける立場になると、心苦しくなり、自分の方から身を引いて、離れてしまったりもします。

でもそのような時に「幸いを受けたのだから、災いをも受けるべきではないか」と、**態度を変えず**に接してくれる人が傍らにいて**共に生きてくれる**ことほど、人生の幸せはありません。ヨブは神さまを信じて生きてきた間に、目先の幸福や不幸で左右されず、どんな人とも共に生きる**真実な心**を養われてきたのではないのでしょうか。そしてそのような心を養い育てるのが、**真の宗教の役割**ではないのでしょうか。

[結] 人生を一変させる愛

私たちの社会には争いが絶えません。愛を誓い合った夫婦でも、親子兄弟の間でも争い傷つけ合います。自分を第一にしてしまうからです。「**兄弟を憎む者は皆、人殺しです。**」「すべて人殺しには永遠の命がとどまっています。」(ヨハネの手紙一 3:15)。人殺しに**平安**はありません。聖書のこの言葉を私たちは真剣に聞きとりましょう。

「**イエスはわたしたちのために、命を捨ててくださいました。**そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だからわたしたちも**兄弟のために命を捨てるべきです**」(ヨハネの手紙一 3:16) イエス・キリストを救い主と信じる時、イエス・キリストが私の心の内に入ってきて、相手のために**自分の命を捨てる愛**を与えて下さいます。この私を愛に生きる者にしてくださいます。そして私たちの人生は**一変する**のです。

どのような事が起こっても、神さまに対する信頼を変えなかった**ヨブの姿**は、父なる神に聞き従って十字架の死をも引き受けた**イエス・キリスト**を指し示しています。またヨブは神さまを信じる者の**真実な在り方**を私たちに教えてくれています。私たちも、どのような悲惨な出来事が起こっても、私たちが救うために、独り子イエス・キリストを十字架につけてくださった**神さまの愛**を信じて、神さまに聞き従って参りましょう。

完